

「研究」と「勉強」との違いを体感

人間発達科学プログラム

倉澤 知裕

私の修士論文の題名は「自治会と総合型地域スポーツクラブとの連携・協力について
ー日本体育協会情報誌の探索的調査から見えてきた探求課題ー」となります。

地域スポーツクラブでの8年に渡る実践（週末のボランティア・運営責任者）と2012～2015年度に在籍・卒業した本学教養学部・心理と教育コースでの学びを基礎にして、大学院進学に挑戦しました。

講義科目はフルタイム在職中の2016～2018年度に履修を終え、2018年春に早期定年退職後受験、2019年入学からの2年間はほぼ修士論文の取り組みに集中しました。

さまざまな体験内容があったわけですが、ここでは、大学院における「研究」と大学までの「勉強」の違いに絞ってお伝えします。

わたしは、1回目の大学卒業後、高校国語教師を5年間務めたことと、スポーツ指導者としての研鑽のため民間企業に勤めつつ教員免許状更新を行ったことなどから、2020年度、地元の公立中学校において国語科非常勤講師の職を得ました。新採用者の研修代替ということで年間8日ではありましたが。

ということで、コロナ禍真っ只中において、「研究」と「勉強（自分は教授するする側）」を同時並行して体験することになったのです。

その体験から、「研究」と「勉強」の違いを極めて鮮明に体感することになりました。

「勉強」の方からお話しましょう。あたり前のことですが、中学生の生活において勉強の場は主に学校の教室であり、その時間は教師と生徒が相まみえる50分単位となります、それに加えて家庭や塾での予習復習・補習も加わりましょうが。いずれにしても勉強は生活における「ある切り取られた時間」において行われるという共通認識があります。

それに対して、「研究」はどうだったのでしょうか？私が体感したことを言葉にすれば「2年間ほぼすべての時間、『研究』が脳裏に覆いかぶさっていた」という表現になります。言い換えれば、朝起きて夜寝るまで、頭のどこかに「研究」のその時々課題（進捗状況の把握、研究方法の選択、突破すべき難題など）が渦巻いており、そのような思考の暇を見つけて食事をし、着替えをし、スポーツの指導をし、妻と話し、トイレに行くetc.といった感じだったのです。もちろん先行研究文献の読み進めなど「勉強」は意識して行いましたが。そして、一定間隔で行われるゼミでは、それまでの進捗状況・成果を報告し、希望を見出すこともあれば、またまた遅れを感じるということも多々ありました。

ですから、祝日など、一時「研究」を脇に置けば余暇が取れそうなきでも、「遅れを取り戻さなければ。自分に余暇を楽しんでいる暇はない」という意識から、ゆっくり行楽を楽しんだ思い出がありません。（コロナ禍でもありましたし）

この体感は、学費の観点から見れば、「日割り計算するともものすごくリーズナブルだな！」という感想にも繋がります。

いかがでしょうか、皆さんも2年間「研究漬け」になってみませんか？

わたしは2019年に入学しました。入学当初は科目履修生として勉強をしながら憧れていた大学院への入学を果たしたにもかかわらず、社会人としての役割、家庭での妻と母親としての役割、地域での市民活動…それまで履いていたワラジをもう一足増やすことが不安でたまりませんでした。ところが覚悟を決めて「大学院生」というワラジを揃えて第一回ゼミに参加してから2年間、ついにワラジを意識することなく修了しました。ゼミの仲間の発表やご指導くださる先生方のお話がとても興味深く、毎回ワクワクと胸躍ることばかりだったからです。それはオンラインになっても同じでした。書籍や論文を読み、うーん…と考えながら家事をし、仕事とボランティアで得たヒントをいかしながらレポートをまとめ、ワクワクしてゼミに参加を繰り返した2年間。さらに他ゼミの方との交流やポスター発表などの貴重な経験もできわたしは「入学してよかった」と心から思っています。

サラリーマン生活が一段落、60代も後半に差し迫ったとき、私は放送大学の修士課程の門を叩いた。

今にして思えば、随分チャレンジ精神旺盛と我ながら感心するのだが、私には、それまでの仕事生活を通じ若い仲間たちと接する中で、自分の手で是非一度確かめたいと思う具体的な問題意識が生まれていた。それを、この歳になって研究テーマとしたのである。

ところで、修士課程における一番の醍醐味は、何ととってもゼミである。とりわけ、放送大学のゼミがユニークなのは、そこに集う学生の多くが社会人として豊富な経験を持っていることだ。

私が所属したゼミは月二回開催され、修士課程の学生はもちろんだが、ここに卒業研究の学生に加え修了生もOBとして参加する。

毎回それぞれが進捗を発表し、先ずは先生から質問の洗礼と温かい激励を受ける。続いて、発表者を囲み、皆が自由に意見交換をする。鋭い質問には汗だくの回答となる。朝9時に始まり、何とか終わるのは夕方5時近くになることも屢であった。

参加者それぞれの体験に深く根差した思いもよらない指摘やアドバイスが、私にとって大きな助けとなった。

予想外の結果をどう解釈するかと頭を抱えていたとき、教諭生活の長かったゼミの先輩が話した教育現場でのひとつのエピソードが、実は私の修士論文全体の大きな骨格となり、それまでの通説とは全く異なる新しい知見へと繋がった。ここでの研究は、決して孤独な営みではないのである。

ゼミは、もともと東京の文京学習センターと遠隔地をリモートで結ぶ併用スタイルだったが、コロナ禍のせいで私の2年目(2020年度)からは完全にZOOM一本になった。

残念ながら対面による交流はなくなってしまったが、むしろそのおかげか、画面を通してのゼミはより活発な意見交換の場になったように思う。

人生においては、子育てで、学校で、職場で、老後の生活でと様々な場面で、疑問や改善・解決すべき問題に遭遇するものである。それらは、一見些細に思え自分でも見過ごしがちであるが、そのような実体験に根差した疑問こそ放送大学修士課程における研究に相応しいテーマと思う。

振り返れば、私のこの二年間は、瞬く間の二年間であった。それは、決して平坦な道のりでもなかった。

しかし、思いもかけない事実を発見した時の驚き、問題の奥に潜む背景を見出した時の達成感、課題の解決への糸口を探り当てたときの喜び、そして仲間たちとの集いを通じて青春時代に舞い戻ったような日々、それらは、送られてきた学位記とともに、今の私には人生後半生の掛け替えのない確かな思い出となっている。

何のために学ぶのか？自分に問い、継続的に学び続けることが大切

人間発達科学プログラム

小見 まいこ

放送大学の大学院での学びには、大きく3つの要素があります。第一に、単位取得を通して、自分の専門的知識を深めること。第二に、ゼミを通して、研究に対する考え方や視点、取り組み方を学ぶこと。第三に、修士論文作成を通して、自らの研究を形にしていくことです。

具体的に説明します。第一の単位取得に関しては、卒業要件として研究指導以外に、最低22単位を取得する必要があります。私の仕事は、教育支援のNPOの経営や事業運営です。仕事、育児に加え、学業を両立させる必要があったため、全科履修生になる前に、科目履修生として4科目を先に学び始めていました。それにより、早めに修士論文の執筆に着手することができました。また、放送大学での授業を通して、実学ベースで知っていた知識を、体系的に学び直し、深い理解へとつなげることができました。それは、仕事をする上での自信にもつながっています。

第二のゼミに関しては、先輩や同期の皆さんの研究進捗発表を通して、研究の進め方やテーマを設定する際のポイント、研究方法等について学ぶことができました。残念ながら新型コロナウイルス感染の拡大に伴い、ゼミが1年次の3月以降中止に。その後は、個別で指導教員の岩崎久美子教授からオンラインで指導をいただくことになりました。途中までではありましたが、研究室の皆さんや先生との交流を通して、研究に対する向き合い方や学びに向かうための刺激を得ることができました。

第三の修士論文に関しては、まず1年目のゼミで研究のテーマや方向性を決めていき、必要な調査の準備を進め、アンケートとインタビュー調査を実施しました。2年目に調査結果の整理・分析、執筆に入ります。1年次に自分の仮説の甘さ、論理の飛躍などを学び、研究に対する力量を高める必要性を感じました。そこで、2年次に新たに開講された「アカデミック・スキルズ」という授業を履修。研究の基本的な進め方や作法等を学びました。前述したように、ゼミの中止を受けて、2年次は、オンラインで岩崎教授から個別指導をしていただくことに。研究の進捗を随時メールで報告し、わからない箇所を明確にして、オンラインでの個別指導に臨みました。多い時では2週間に1度のペースで指導いただき、骨子を固めていきました。実は、最後のまとめに向けてラストスパートというときに、第二子を出産しました。つわりで辛い時や出産直後は、体調を崩し不安が募りましたが、岩崎教授に励ましやご支援をいただき、なんとか最後まで書き上げることができました。

今振り返ると、岩崎教授の伴走や丁寧なご指導、家族の理解がなければ、到底修了することはできませんでした。加えて、大人になってからの学びは、自立的な学習やモチベーションの維持が欠かせません。何のために学ぶのか、学んだことをどのように生かすのかを明確にし、自分を動機づけし続けていくことが重要です。それを乗り越え、無事に修士課程を修了できたことは、自分のこれからの糧になっていくと確信しています。

日々力を注いでいる職務とは異なる切り口で自分を高めたい。放送大学大学院での学びは、この内なる自己成長の欲求を十分に満す貴重な経験となりました。

放送大学での学びへのチャレンジを決意してから、この実感に辿り着くまでには大きなワクワクドキドキが数回ありました。その第一は、数十年ぶりの入試という第1ハードルへの跳躍です。それは新鮮で、日常に新たな刺激をもたらしました。難しいだろうと思いながらも、心のどこかでは「学び」を求めている者にチャンスは与えられるという期待がありました。結果、「夢は叶う」と、50を過ぎて我ながら少し気恥ずかしい言葉に心が躍りました。第2ハードルは、研究への漠然とした意識を明らかにし、テーマ設定と研究方法の模索、トライ&エラーに粘り強く立ち向かっていくことでした。ここを突破しないと最終コーナーを回って直線コースで待ち受ける論文作成に進めません。時には、研究という名の迷路にはまり、寝ても覚めても論文特有の細かい文字と言い回しが頭の中を巡る日々もありました。しかし、自分の研究への課題意識が深まり、目的や方法が定まって、集めたデータからあることが見えてきた時の喜びは、「生涯自己成長」の動機付けに十分なインパクトがありました。主張したいことの根拠を明確にするために試行錯誤することの楽しさも味わい、「教育」に対する考え方や構えが変容していく姿を俯瞰している自分がいることにも気づきました。

また、修士論文作成と同時に、教育行政論や海外の教育改革などの科目受講を通して新たな知識を身に付けることで、日常の風景も変わるという体験しました。これまで持っていなかった視点で物事を見て、考え、自分としての思いを整理していく。今更ながらですが、視野が広がることで「生き方」までもが動かされたように思います。まさに、「教養は生きるエネルギー」です。

働きながもさらに自己成長を図るという志を共にする、様々な職業や立場の、また、北海道から宮崎県と全国から集った同期生との関わりも得難い者でした。そして、ゼミ担当の小川正人先生の真の研究者像に触れさせていただけたことは人生上の貴重な財産になりました。コロナ禍の影響で、互いの取り組みを讃え合い、感謝を伝え合う「最後の打ち上げ」は完了していません。修了はしましたが、ゼミは閉じていないことが幸いです。